稲　作　技　術　情　報 No.7

平成２７年９月１日
鳥取県産米改良協会

今後の管理のポイント

■カメムシ防除の徹底

○水田周辺に発生源（出穂したイネ科植物）が多いほ場、穂揃い期～乳熟初期にかけて防除を行っていないほ場で発生量が多い傾向である。

○8月下旬以降に出穂したほ場で、防除を行っていない場合や、周辺に発生源が多く要防除水準を越える場合には直ちに防除を行うこと。

■完全落水は収穫5日前以降

○早期に落水すると玄米の品質が低下することから、収穫5日前までは完全落水しないように心がけましょう。

■積算気温、青籾率を確認して適期に収穫

○例年、刈遅れによる品質低下が見られています。

○品種ごとに以下の出穂後積算気温を目安に適期収穫を励行しましょう。

・ひとめぼれ：1，000～1，110℃（青籾率13～19%）
・コシヒカリ　：　910～1，070℃（青籾率16～18%）
・きぬむすめ：1，010～1，100℃（青籾率7～24%）

Ⅰ　天気概況

1　天気予報

平成 27 年 8 月 27 日
広島地方気象台

中 国 地 方 1 か 月 予 報

（予報期間：平成 27 年 8 月 29 日～平成 27 年 9 月 28 日）

1．予想される天候

①向こう1か月（8月29日～9月28日）

・1週目と2週目は寒気の影響を受けやすく、気温は低温傾向で経過するでしょう。3～4週目は暖かい空気の影響を受けやすく平年並か高い見込みです。
向こう1か月を平均した気温は平年並か低い見込みです。

・前線や湿った気流の影響を受けやすい時期があるでしょう。このため向こう1か月を通した降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込みです。

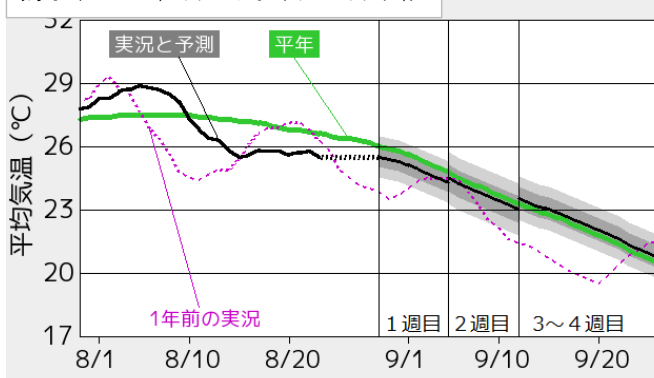
②1週目（8月29日～9月4日）

・高気圧と低気圧の影響を交互に受け、天気は数日の周期で変わるでしょう。前線や湿った気流の影響を受けやすく、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。

③2週目（9月5日～9月11日）

・高気圧と低気圧の影響を交互に受け、天気は数日の周期で変わるでしょう。前線や湿った気流の影響を受けやすく、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。

④3～4週目（9月12日～9月25日）

・高気圧と低気圧の影響を交互に受け、天気は数日の周期で変わるでしょう。

・実況期間の太い実線：地域平均気温平年偏差（7日平均値）、横軸の値は平均期間の中日。
・予報期間には7日平均気温の予測に対する信頼の程度が40%の幅【濃い陰影の範囲】と信頼の程度が70%の幅【濃い陰影と薄い陰影の範囲】を表示。
・水平な3本の実線：予報期間の1週目、2週目、3～4週目の平均。

２ 低温に関する異常天候早期警戒情報（中国地方）

平成27年8月31日14時30分　　広島地方気象台 発表

要早期警戒（気温）
警戒期間 9月５日頃からの約1週間
対象地域 中国地方
警戒事項 かなりの低温（7日平均地域平年差－２．２℃以下）
確率　　 30％以上

今回の検討対象期間（9月５日から9月14日まで）において、中国地方では、9月５日頃からの1週間は、気温が平年よりかなり低くなる確率が30％以上と見込まれます。

農作物の管理等に注意してください。また、今後の気象情報に注意してください。

なお、中国地方では、昨日（30日）までの7日間平均気温平年差は、－１．９℃で「かなり低い」となりました。今後1週目から2週目にかけて気温が低く、かなり低くなる見込みです。

３ 気象経過

（鳥取）

時期	気　温（℃）						日照時間		降水量	
	27年			平年差			27年	平年	27年	平年
	平均	最高	最低	平均	最高	最低	(hr)	比	(mm)	比
5上	18.2	24.4	12.4	1.3	1.7	1.0	75.5	117	3.0	8
中	19.2	25.6	13	1.9	2.9	0.9	64.5	107	76.0	140
下	20.6	28.4	14.3	1.7	4.1	0.5	106.9	147	5.5	14
6上	20	25.2	14.7	-0.4	-0.6	-1.0	59.9	92	46.0	142
中	22.8	27.9	19.2	0.9	1.1	1.6	43.1	76	26.0	70
下	22.4	27.1	18.4	-0.4	0.0	-1.0	48.6	133	93.0	113
7上	22.5	26.4	19.7	-1.9	-2.4	-1.3	30.5	69	65.0	94
中	27	31.4	23.2	1.4	1.4	1.1	48.7	112	27.5	29
下	28.4	33.3	24.9	1.3	1.1	1.8	74.0	98	21.5	59
8上	28.6	34.5	24.5	1.0	1.7	1.0	109.7	149	0.0	0
中	25.8	31.1	22.1	-1.4	-1.4	-1.1	46.0	69	63.5	167
下	24.6	28.7	21.3	-1.8	-2.9	-1.0	43.7	66	68.0	135

（茶屋）

時期	気　温（℃）						日照時間		降水量	
	27年			平年差			27年	平年	27年	平年
	平均	最高	最低	平均	最高	最低	(hr)	比	(mm)	比
5上	14.8	22	7.7	0.8	1.4	0.4	65.3	115	6.5	17
中	16.1	22.3	8.7	1.9	1.9	0.7	57.9	113	48.5	87
下	17	25.2	9.3	1.4	3.5	-0.2	80.6	128	4.0	9
6上	16.7	21.8	11	-0.5	-1.8	-0.3	47.4	83	62.5	169
中	19.5	24.4	15.2	0.8	0.2	1.7	29.5	58	42.5	84
下	18.9	23.9	14.8	-1.1	-0.7	-1.2	27.8	91	90.0	76
7上	20.4	24.8	16.7	-1.1	-1.3	-0.7	27.0	70	56.5	66
中	23.6	27.6	20.3	1.2	0.5	1.8	22.5	64	41.5	35
下	24.8	29.4	20.8	1.3	0.7	1.6	59.1	97	15.0	27
8上	25.4	32.3	20.1	1.8	3.2	0.9	74.6	133	12.0	24
中	22.1	27.4	18.4	-1.3	-1.2	-0.7	31.9	63	115.5	235
下	21	25.5	17.4	-1.4	-2.2	-0.5	43.7	83	104.5	191

Ⅱ　生育概況

・8月中旬以降、低温・寡照・多雨となっており、水稲の生育は緩慢になっている。特に現地の遅植等のきぬむすめで出穂が遅れている。

・5／11移植（農試作況田）の出穂期は、ひとめぼれコシヒカリとも平年並である。

・5／25移植（農試作況田）の出穂期は、平年に比べて、ひとめぼれで1日、コシヒカリ・きぬむすめで2日遅くなっている。

・出穂は平年並からやや遅くなり、今後の気温が平年並か低いと予想されるため、平年に比べて遅く成熟期を迎えるものと予想される。

・幼穂形成期においては、茎数は平年より1～3割多く、草丈は平年並～やや短い草姿になっている。葉色は平年並～やや濃い。

水稲生育状況（農業試験場 作況田 平成27年8月15日現在）

5月11日移植(4月16日播種)

調査項目		ひとめぼれ			コシヒカリ		
		H27	平年	差・比	H27	平年	差・比
生育ｽﾃｰｼﾞ	田植日	5月11日	5月11日	－	5月11日	5月11日	－
	最高分げつ期	7月3日	6月30日	+3	7月6日	6月30日	+6
	幼穂形成期	7月3日	7月5日	-2	7月8日	7月8日	+0
	出穂期	7月25日	7月25日	+0	7月29日	7月29日	+0
	成熟期	－	9月1日	－	－	9月6日	－
葉齢（葉）	45日後(6月25日)	10.6	10.6	+0.0	10.5	10.6	-0.1
	幼穂形成期	11.3	11.8	-0.5	11.8	12.0	-0.2
	出穂期(止葉葉位)	13.7	13.9	-0.2	13.6	14.0	-0.4
茎数（本/㎡）	45日後(6月25日)	642	503	128%	502	454	111%
	幼穂形成期	656	527	124%	535	468	114%
草丈（cm）	45日後(6月25日)	49	49	100%	51	54	95%
	幼穂形成期	63	68	93%	70	76	92%
葉色（SPAD値）	45日後(6月25日)	40.8	39.6	+1.2	38.6	38.5	+0.1
	幼穂形成期	36.7	36.4	+0.3	34.0	34.3	-0.3
	出穂期	35.0	38.9	-3.9	37.6	36.2	+1.4

1) 平年値は直近5年間の平均値。
2) コシヒカリの幼穂形成期欄は、幼穂形成期の翌日に調査した値。
3) 葉色の出穂期の平年値は直近2年間の平均値。

5月25日移植(5月5日播種)

調査項目		ひとめぼれ			コシヒカリ			きぬむすめ		
		H27	平年	差・比	H27	平年	差・比	H27	平年	差・比
生育ｽﾃｰｼﾞ	田植日	5月25日	5月25日	－	5月25日	5月25日	－	5月25日	5月25日	－
	最高分げつ期	7月9日	7月6日	+3	7月9日	7月10日	-1	7月9日	7月6日	+3
	幼穂形成期	7月12日	7月12日	+0	7月15日	7月15日	+0	7月27日	7月24日	+3
	出穂期	8月2日	8月1日	+1	8月5日	8月3日	+2	8月15日	8月13日	+2
	成熟期	－	9月9日	－	－	9月11日	－	－	9月26日	－
葉齢（葉）	45日後(7月 9日)	11.1	11.5	-0.4	11.2	11.3	-0.1	10.8	11.1	-0.3
	幼穂形成期	11.7	11.9	-0.2	11.8	11.9	-0.1	12.8	12.6	+0.2
	出穂期(止葉葉位)	13.4	13.8	-0.4	14.1	13.9	+0.2	15.0	14.8	+0.2
茎数（本/㎡）	45日後(7月 9日)	602	505	119%	557	424	131%	552	452	122%
	幼穂形成期	589	499	118%	551	411	134%	512	423	121%
草丈（cm）	45日後(7月 9日)	61	63	97%	61	68	89%	60	64	94%
	幼穂形成期	68	67	100%	68	77	89%	82	82	100%
葉色（SPAD値）	45日後(7月 9日)	36.4	37.6	-1.2	36.1	38.2	-2.1	39.7	37.8	+1.9
	幼穂形成期	36.0	35.5	+0.5	35.3	33.8	+1.5	30.0	29.2	+0.8
	出穂期	35.7	37.1	-1.4	36.5	37.9	-1.4	35.6	33.8	+1.8

1) 平年値は直近5年間の平均値。
2) 幼穂形成期欄はそれぞれ、ひとめぼれは幼穂形成期の翌々日、コシヒカリは前日、きぬむすめは翌日に調査した値。
3) 葉色の出穂期の平年値は直近2年間の平均値。

Ⅲ　技術対策

1 病害虫防除

(1)いもち病(穂いもち)

きぬむすめ等の中生品種において、穂揃い期防除を行っていないほ場では直ちに防除を行う。また、穂いもちの多発が懸念される場合は傾穂期に追加防除を行う。

(2)斑点米カメムシ類(平成27年8月3日付、病害虫発生予察注意報第１号発表)

(ア)　現在、中生品種や早生品種の遅植えほ場では、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなどの発生が認められる。水田周辺に発生源(出穂したイネ科植物)が多いほ場、穂揃い期～乳熟初期にかけて防除を行っていないほ場で発生量が多い傾向である。

(イ)　8月第4～5半旬に出穂期を迎えたほ場で、穂揃い期～乳熟初期にかけて防除を行っていないほ場では直ちに防除を行う。また、防除を行ったほ場においても、周辺に発生源が多い場合は防除後も発生状況に注意し、要防除水準を超えている場合は防除を行う。

(ウ)　これから穂揃い期を迎えるほ場では、穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生が多い場合には、7～10日後に追加防除を行う。また、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地、畦畔などの草刈りを行っていない場合は、先ず、穂揃い期～乳熟初期に草刈りを行い、草刈り後直ちに防除する。

(エ)　水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので取り除く。

(オ)　防除薬剤は、平成27年度病害虫発生予察注意報第1号(8月3日発表)を参照する。

2 水管理

○早期落水により白濁粒が増加

・高温年に早期落水すると白濁粒が増加し、玄米品質が低下する(下図参照)。

・地耐力を高めるためには、間断灌漑の干す期間を長めにとり、徐々に土を固めていくこと。特に中干しが不十分なほ場で、雨水に頼った早期落水は絶対に行わないこと。

○中生品種では特に早期落水に注意

・高温年でも安定して品質が良い「きぬむすめ」でも早期落水により白濁粒が増加した事例が見られた。

・早生品種にあわせた慣行水利による落水の結果、中生品種が早期落水となり、これによる品質低下事例が各地で見られている。地域で話し合いを行い、きぬむすめのステージにあわせた落水時期の設定を行うことが品質向上のためには特に重要である。

・中生品種は、現在登熟初期に当たっており、要水量が特に高まる時期と重なるため、特に注意して間断灌漑を励行すること。

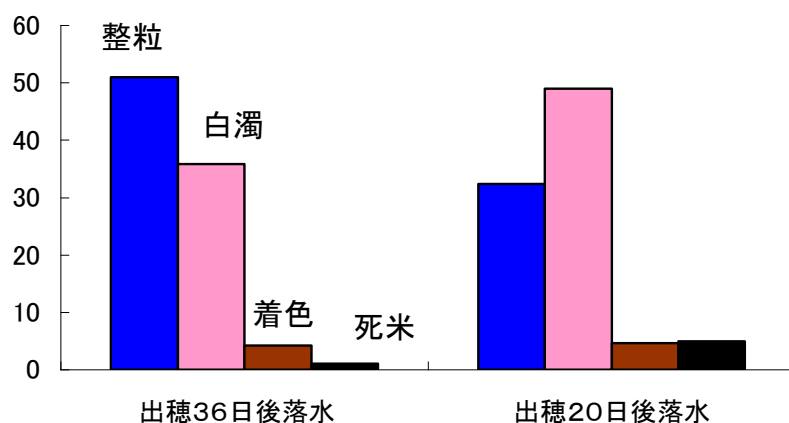



図　落水時期の違いによる玄米品質　(1995、鳥取農試)

※　(ビニールハウスで高温条件を作出)

3 適期収穫

（1）本年の適期収穫の目安

主要品種ごとの収穫適期目安（平成26年現地・農試調査を改変）

品種	区分	出穂後日数（日）	出穂後積算気温(℃)	青籾率（%）	籾水分（%）	精玄米歩合（%）	整粒率（%）
コシヒカリ	現在の基準	－	1,000	10	－	－	－
	平成26年収穫適期	37～46	910～1,070	16～18	24～26	85.7～89.7	78.9～82.0
ひとめぼれ	現在の基準	－	1,000	5～10	－	－	－
	平成26年収穫適期	42～46	1000～1,110	13～19	25～26	92.9～94.3	71.1～83.8
きぬむすめ	現在の基準	40～45	1,050～1,150	5～13	22～24	95.2～96.2	75.0～83.6
	平成26年収穫適期	46～50	1010～1,100	7～24	25	91.6～94.3	80.8～83.3

注1）調査年次：2014年、調査場所；現地（コシヒカリ：7、ひとめぼれ：4、きぬむすめ：4）、農試1ほ場（コシヒカリは2ほ場）

注2）収穫時期は現地・農試データより推定した。現地試験以降の刈取時形質の数値は、農試試験（分施、元肥一発）の平均値とした。

○収穫適期は平年並からやや遅い

・県内多くの水田も農業試験場の作況試験と同様の傾向で、平年よりやや遅く出穂したものと見られる。出穂がやや遅く、今後の気温が平年並か低いと予想されることから、**収穫適期は平年に比べて遅れるものと予想される。**

○収穫適期の目安

本年度は昨年度行った収穫適期試験（上表）を基に、農業試験場が作成した品種別、標高別の収穫適期（次ページ）を参考に収穫時期を判定し、**予測収穫適期の3～4日前**には収穫の準備を行うこと。

また時期が近づいたらほ場で上表を参考に青籾の割合を確認すること。

○青籾率

青籾率が少々高い場合であっても気象条件によっては収穫適期を迎えている場合が少なくない。

○高温年になった場合の弊害

高温年には、成熟後であっても種子呼吸により、種子に貯蔵されたデンプンが分解消費され、白濁粒が増加するため、収穫遅れによる品質低下が著しい。

○コシヒカリの対策

・ひとめぼれとコシヒカリでは、品種特性としてひとめぼれの方が刈り遅れによる品質低下が少ないことがわかっており、場合によってはコシヒカリを先に収穫することが有効である。
（具体的には、コシヒカリが機械作業困難な程度に倒伏すると穀粒が高水分で推移し、穂発芽粒が発生、田面が乾燥しにくくなって更に収穫困難となるため、こうなることが予想される場合が該当する。）

・コシヒカリとひとめぼれは収穫適期が近く、同時進行で収穫する場面が多いため、迅速に収穫乾燥作業を進めることで極力刈り遅れとならないように配慮する必要があり、**コンタミを起こさないよう正確な作業が求められる。**

○産地全体の良質米生産

上表は最適期間を示したものであり、コンバインの刈取、乾燥調製施設の受入能力を勘案しつつ、**産地全体がこの期間に近い時期に収穫することが、産地の良質米生産に有効である。**

（2）標高別出穂期別の収穫適期予測（9月１日農業試験場公表）

鳥取県農業試験場

出穂した時期別の収穫適期予測について （平成27年9月1日現在）

農業試験場では、成果を広く活用していただくため、平成27年8月4日から試行的に収穫適期の予測について農業試験場ホームページで情報提供を行います(毎週火曜日更新予定)。収穫作業計画の参考として活用していただき、早めの収穫準備と適期収穫による米の品質向上を目指しましょう。

【現在の状況】 8月中旬以降、.気温が低く推移しているため、収穫時期が遅れる傾向がみられています。

【情報を活用する上での注意点】
〇収穫適期は、出穂後の日平均気温積算値を基に予測しており、コシヒカリ 910～1070℃、ひとめぼれ 1000～1110℃、きぬむすめ 1010～1100℃ となる月日です。
〇日平均気温は、アメダスの実測値及び1ヶ月予報値を基に各1kmメッシュの気温を推定した値を用いています。
〇現地試験により確認を行いましたが、予測誤差は概ね1日以下となっています。
〇地形、かんがい水温などのほ場条件、水管理、施肥などの栽培条件等によっては誤差がでることがあります。
〇収穫適期を予測したいほ場の標高は、地図等で検索してください。
※詳細なデータの問い合わせについては、農業試験場 または、お近くの農業改良普及所へ。

ひとめぼれ 予測収穫適期 （日平均気温積算1000～1110℃）

（月／日）

標高	出穂期 （ほ場の約50%が出穂した日）				
	7/20	7/25	7/30	8/5	8/10
0～49m	(8/27) ～ 9/1)	9/2 ～ 9/7	9/8 ～ 9/13	9/15 ～ 9/20	9/22 ～ 9/25
50～99m	(8/28) ～ 9/2	9/3 ～ 9/8	9/9 ～ 9/14	9/16 ～ 9/22	9/23 ～ 9/27
100～149m	(8/29) ～ 9/3	9/4 ～ 9/9	9/10 ～ 9/15	9/17 ～ 9/22	9/24 ～ 9/27
150～199m	(8/29) ～ 9/3	9/4 ～ 9/9	9/10 ～ 9/15	9/18 ～ 9/23	9/24 ～ 9/28
200～249m	(8/30) ～ 9/4	9/5 ～ 9/10	9/11 ～ 9/16	9/18 ～ 9/24	9/25 ～ 9/29
250～299m	(8/31) ～ 9/5	9/5 ～ 9/11	9/11 ～ 9/17	9/19 ～ 9/25	9/26 ～ 9/30
300～349m	(8/31) ～ 9/5	9/6 ～ 9/11	9/12 ～ 9/17	9/20 ～ 9/26	9/27 ～ 10/1
350～399m	(9/1) ～ 9/6	9/6 ～ 9/12	9/13 ～ 9/18	9/20 ～ 9/26	9/27 ～ 10/1

注1）表中の()の日付表示は、9月1日時点で収穫適期の予測日を過ぎていることを示す
注2）中央農研のメッシュ農業気象システムの気温データを使用して作成

コシヒカリ 予測収穫適期 （日平均気温積算910℃～1070℃）

（月／日）

標高	出穂期 （ほ場の約50%が出穂した日）				
	7/25	7/30	8/5	8/10	8/15
0～49m	(8/29) ～ 9/5	9/4 ～ 9/11	9/11 ～ 9/18	9/17 ～ 9/25	9/23 ～ 10/1
50～99m	(8/30) ～ 9/6	9/5 ～ 9/12	9/12 ～ 9/20	9/18 ～ 9/26	9/24 ～ 10/3
100～149m	(8/31) ～ 9/7	9/6 ～ 9/13	9/13 ～ 9/20	9/19 ～ 9/27	9/25 ～ 10/4
150～199m	(8/31) ～ 9/7	9/6 ～ 9/13	9/13 ～ 9/21	9/20 ～ 9/28	9/26 ～ 10/5
200～249m	(9/1) ～ 9/8	9/7 ～ 9/14	9/14 ～ 9/22	9/20 ～ 9/29	9/27 ～ 10/6
250～299m	(9/1) ～ 9/9	9/7 ～ 9/15	9/15 ～ 9/23	9/21 ～ 9/30	9/27 ～ 10/7
300～349m	9/2 ～ 9/9	9/8 ～ 9/15	9/15 ～ 9/23	9/22 ～ 10/1	—
350～399m	9/2 ～ 9/10	9/8 ～ 9/16	9/16 ～ 9/24	9/22 ～ 10/2	—

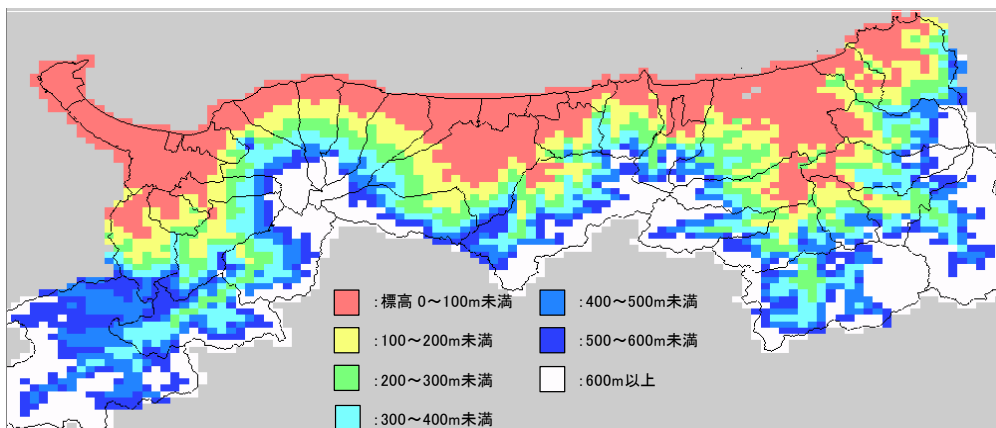
注1）表中の()の日付表示は、9月1日時点で収穫適期の予測日を過ぎていることを示す
注2）中央農研のメッシュ農業気象システムの気温データを使用して作成

きぬむすめ 予測収穫適期 （日平均気温積算1010～1100℃）

（月／日）

標高	出穂期 （ほ場の約50%が出穂した日）				
	8/10	8/15	8/20	8/25	8/30
0～49m	9/22 ～ 9/26	9/28 ～ 10/3	10/5 ～ 10/10	10/12 ～ 10/17	10/19 以降
50～99m	9/23 ～ 9/28	9/30 ～ 10/5	10/6 ～ 10/12	10/14 ～ 10/20	10/21 以降
100～149m	9/24 ～ 9/29	10/1 ～ 10/6	10/7 ～ 10/13	10/15 ～ 10/21	—
150～199m	9/25 ～ 9/30	10/1 ～ 10/7	10/9 ～ 10/14	10/16 ～ 10/23	—
200～249m	9/26 ～ 10/1	10/2 ～ 10/8	10/9 ～ 10/15	—	—
250～299m	9/26 ～ 10/2	10/3 ～ 10/9	10/11 ～ 10/17	—	—

注）中央農研のメッシュ農業気象システムの気温データを使用して作成

【参考】 鳥取県内における1kmメッシュの平均標高分布図

4　適正な収穫・乾燥・調製作業

（1）収　穫

・穂いもち、カメムシ類、内頴褐変病等病害虫の多発したほ場や倒伏等により品質が著しく劣る稲は仕分けして刈り取り、健全な籾に混ざらないよう乾燥も別に行う。

・倒伏の著しいほ場でのコンバイン刈り取り作業は、機械トラブルを避けるため、①作業速度は低速、②刈取条数はやや控えめ、③倒伏した株に対し追い刈りとなるような行程を選択する等に留意する。

・刈取品種が変わる場合は、コンバインの清掃をしっかりと行い、混種が起こらないように細心の注意を払う。コンバインの取扱説明書清掃の手順に従い、エアーコンプレッサーや動力散粉機を利用して、扱き胴・各種網、受け、ラセン等の残留籾を完全排出させる。

（2）乾　燥

・収穫時の生籾水分は、周期的な降雨や倒伏により30%以上となることもあるので、乾燥作業には十分注意する。高水分籾は高温下では急速に変質するので、収穫後直ちに乾燥機に張り込み通風を行う。また、高水分籾は水分ムラが大きいので、25%程度まではなるべく常温で乾燥する。

籾　水　分(%)	28	27	26	25	24	23	22	21	20
放置可能時間(hr)	3	4	4	5	6	12	24	48	72

（注）三重農試資料

（3）調　製

・籾の水分測定は、勘に頼らないで正しく調整された水分計を用いて行う。試料は未熟粒を取り除いた整粒のみとし、乾燥中の籾は穀温補正を行って測定する。

・乾燥機の熱風温度、循環速度は機種所定の方法に従い、毎時乾減率は 0.8%以下（遠赤外線乾燥機は 1.0%以下）とする。特に良食味を確保する際には、先ず低温で水分ムラを均してからゆっくり時間をかけて乾燥する。

・仕上げ水分は 15.0～15.5%の範囲とし、過乾燥にならないように注意する。

・過乾燥を防止するためには、乾燥機のタイマー設定を1～2時間控えめとし、以後こまめに水分測定しながら仕上げる。また、青未熟粒の割合に応じて玄米水分を決定し乾燥機を止める。

乾燥後の玄米水分の変化の目安

100粒中の青未熟粒	乾燥機を止める玄米水分	乾燥機停止後の玄米水分
0～5粒	16．0～15．6%	0．5%程度乾く
6～10粒	15．5～15．1%	ほとんど変わらない
11粒以上	15．0%	0．5%程度戻る

（注）富山県米作改良対策本部資料

【参考】適期収穫により、等級や食味の向上を目指しましょう

【等級や食味向上で最も効果的な対策は？】

白濁未熟粒の発生は、刈遅れになったとき、気温が高いとき、過剰に籾を着けたとき、栄養不足になったとき、日射量が不足したときに多くなることが知られています。**今からの対策で最も効果的なものは、適期収穫です。**

刈遅れとなった場合に、白濁未熟粒（特に基部未熟粒）や着色粒、胴割粒が多発し、加えて、充実度や玄米光沢が劣り、適期収穫の玄米と比べて**明らかに検査等級の低下**につながっています。

しかも、収穫が遅れると、**食味も低下する**ことが知られています。

鳥取県の低等級の大きな原因は刈り遅れであると思われます。このため引き続き適期収穫への取り組みを訴えるところです。

JAでは、適期に収穫された籾の乾燥に対応できるよう施設稼働の準備を進めています。また、下図のように、収穫が遅れれば遅れるほど等級が下がるという試験結果も出ていますので、できるだけ適期に収穫することが重要です。

図　出穂期後日数と等級の関係

（2002、2003農業試験場、品種コシヒカリ）

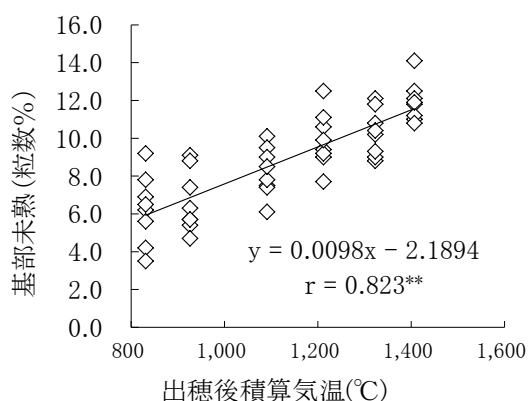
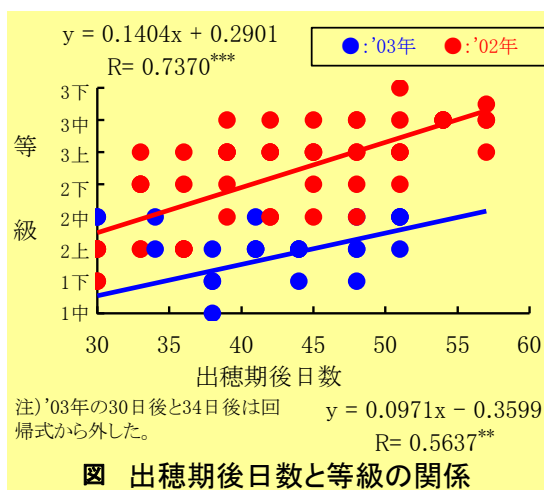
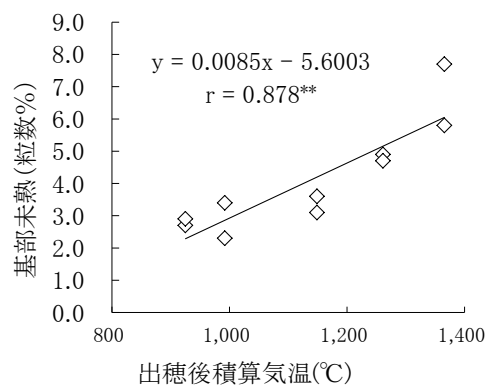



表　コシヒカリの収穫期別食味成績

サンプル	外観	味	総合	ランキング
適期収穫	0.30	0.50	0.55	A相当
適期10日後	−0.25	0.10	0.10	A' 相当

鳥取農試産米を穀物検定協会に試験依頼した。

図.「コシヒカリ」の出穂後積算気温と基部未熟との関係
注1）調査年次：2011年、調査場所：鳥取農試
注2）n=48

図.「きぬむすめ」の出穂後積算気温と基部未熟との関係
注1）調査年次：2013年、調査場所：鳥取農試
注2）n=10(坪40株・穂肥Ⅱ2kg)

※農業者の方の中には適期収穫は水分が高いとしてためらう例が見受けられます。
水分を気にするあまり刈り遅れにならないように適期収穫を心がけましょう。